

## 連載エッセイ 〈ときどきの老い〉 —— 2 3

### 下水道としても——1

今回からは当分「下」ネタになります。

先日亡くなった「立川談志」が、落語のまえふりで、「若い日には、ずいぶん暴れた息子も、その方がダメになっただけでなく、下水道としても、やっかいなものになってしまった。」としみじみ述懐していたのを思い出します。

老化は「眼・歯・下半身」の順に現れてくる、とよく謂われますが、私はその「下半身」とは、性にまつわるものだとばかり思っていたのです。しかし「性欲」から解放されるのは、悪いことばかりでもない。

ホントにつらい老化は「下水道としても、やっかいなもの」になることです。

私も、下水道にまつわる事件！！を次々に体験するようになりました。

#### 事件簿・その1「大は小を兼ねない」

いま思い出すと、私がそうした「老いの徵候」を感じたのは45才ころだったと思います。まだまだ忙しいころで、睡眠不足の日々。夜も不眠どころか爆睡の日々。

その夜に限って、珍しく明け方前なのに、尿意で目が覚めてしまった。階下のトイレに入る。あれ、おかしいな、出てこない。おかしいな、あんなに「したい」からわざわざ起きたのに。なんだか尿意も冷めてしまい、すごすごと二階のフトンに戻る。

あれ～、やっぱり俺は「出たいんだ」な。お腹はパンパンに張っているから、出たいんだ、早く楽になって、もう一眠りしたい。だが、出たいのは何なんだ！尿なのか大便なのか？尿意だか便意だか判然としない。そんなことって在るの？信じられない！！さっきは尿意だとばかり思っていたから。今度は、大の方をリキんでみよう。でも？？？出てこないな～。

もういちどフトンに戻る。ここで、ああ、自分は下痢しているんだ、便意だったんだと初めて判る。三度目のトイレで大量に出て、ホッとした、スッキリしたー。

あれ、おかしいな。いつもなら大便に伴って出る箸の小便がないなあ。これが私の「大は小を兼ねない」事件の顛末です。

いま書きながら気づいたのですが、これは眠りが深くて、ようやく三度目に

頭が覚醒して、事態がのみこめた、ということらしい。こんなに、深い眠りはもう失われて久しいが・・。

それにしても、「大」か「小」か混乱してしまったのは、いってみれば、アクセルとブレーキをまちがえて踏んでしまう、これも老人特有の現象とよく似ている。

みなさんが体験的によく承知しているように、人間の「入り口」、呼吸の鼻の粘膜や、食物の口の粘膜や舌や喉などは、神経がことのほか密に細かく分布している所。まったく同じように、出口=下水道の、いわゆる「括約筋」の神経分布はまことに密で繊細です。

その上、「大」と「小」は場所的に近いし、通常は「大は小を兼ねる」ように、神経は連携ネットワークを構成している。

昔、中小病院で当直のバイトしていたとき、患者さんからの電話で緊急に往診を頼まれて、私が患家に駆けつけたことがあります。なにごとかと思ったら、おじいちゃんが、尿が出ない、と訴えるのです。いわゆる「尿閉」の状態。導尿カテーテルを使えば簡単ですが、往診道具には入っていない。

横になっていては集中できない、とにかく体を起こしましょう、そうだな膝立ちできますか、そうそう、はい前をだして、尿瓶とか考えないで、眼をつぶって、集中しましょう。そこで私がしたことは何だと思います？

「シーシー、シーシー」の合図というか、掛け声というか、小さい子にお母さんがやるあの優しい声掛けです。待つこと数十秒、チョロチョロから始まって、最後はドーッと排尿できました。よかったです、気持ちいいでしょ！（若いドクターとしては上出来です）。

このおじいちゃんと、同じようなことを私はもうしばしば体験しています。夜中に尿意で起きてトイレに入つてから、実際に尿が出てくるまで時間がかかること・・かかることがあります。

「大」も「小」も、当たり前のようにコントロール出来ていた年齢はもう過ぎ去った、それを自覚した最初が 40 台半ばだったのです。――以下次号――

以下、ぜんぜん別です。スペースがあったら、ちょっと書き添えてください。

震災の 〈余震余話〉

私の脳梗塞は、昨年の 4 月 25 日。

水戸で被災した義父が脳梗塞になって、以来寝たきりになったのが 4 月 11 日。

福島の被災者の受け入れで、不眠不休で陣頭指揮にあたった S 県の職員のMさんが脳梗塞でたおれたのは 4 月 20 日。彼は三味線の先輩で、最近顔をみせないなと思ったら、上のことを聞かされてびっくり。皆さん「余震」です。

## タイチーライフ 太極拳的生活・55

### 〈新年・信念・初心〉・・・2

前回のパンの話には色々な意見や感想、質問などがありましたので、少し解説してみましょう。

「戒め」の話として紹介したのですが、人によっては理想のパンではなくなってしまったがパン屋としては大成功を収めた話と取る人もいたようです。パン屋としての成功とは何か？と考えると出荷数が増え、売り上げが伸び、大会社になること、それは確かに成功と言えるでしょう。

しかし、〈初心〉は、お金儲けや社長になる為ではなく、美味しいパンを一人でも多くの人に食べて喜んで貰いたかったのです。不味いパンを大量生産して売るパン屋になってしまったのは**大失敗**だということです。

この人はもともと、大量生産されているパンが美味しいから、手作りの本物のパンを自分で作る事にしたのです。そして、そのパンが本当に美味しいからこそ周りの人達に求められるようになったのです。

売るようになったのは、美味しいパンを他人の為に作り続けるには、それを仕事にする事が最善だったからです。その後の変化も、自分のパンを求めている一人でも多くの人にパンを届けたいという想いからの、小さな妥協や苦肉の策だったのです。

決して儲けるためや会社を大きくするために、妥協したのではないです。それなのに、結局、自分の美味しいパンを作り届けるための仕事が、かつて自分が不味いと否定したパンを売る商売になってしまったのです。

この話からは多くの教訓が読み取れます。特に私が重要だと思うのは、前進する為の努力が進むと、ある時から前進するために妥協の必要に迫られると言う事です。諦めの妥協と違い、やむを得ない妥協はより良くなる為に仕方がないと思いがちなのです。

しかし理想や信念にとって、良い結果を生む妥協など存在しません。理想や信念を劣化させる最大の原因こそ小さな妥協なのです。

では一切妥協せず、常に前進し続けるには如何したら良いのでしょうか？美味しいパンを大勢の人に提供し続けるにはどうしたら良かったのでしょうか？